

第23回「日韓高校生交流キャンプ」参加生徒の感想文 ⑤

「かけがえのない六日間」

永田 陽生

長野県松本深志高等学校 2年



僕は、このキャンプに参加して、とても多くのものを得ることが出来ましたが、そのなかでも特に自分の中で大きいなと感じるもの三つを書きたいと思います。

まず一つ目は、東日本大震災をより身近に感じる事が出来たということです。僕の住んでいる長野県と東日本大震災で被災された東北とは、同じ日本であっても遠く離れた地域であり、さらに長野県には海がないので、正直今までは感情移入しきれない部分もありましたが、今回のキャンプでホテル観洋の語り部さんによるお話を聞いて、そして実際に被災された現場を見て、津波とはこれほどまでに破壊力があるのか、こんなにも高いところまで波が来たのかと、津波の恐ろしさを実感出来、それによって被災された方々へより深い追悼の気持ちを抱くことが出来るようになりました。

二つ目は、経済やビジネスについて興味が湧いたことです。僕は今まで経済などはなんとなく難しそうで踏み込みづらい領域

という印象がありました。しかし、今回の事業発表会で、チームで話し合うなかで、今までにないくらい真剣になってテーマと向き合い、仲間とお互いの意見を本音でぶつけ合っている自分がいました。実際このようなことについて考えるのはとても楽しく、とても本気になることが出来たので、意外と自分に合っているのかなと、経済やビジネスについてのとらえ方が変わりました。どんなに良いオープンキャンパスに行くよりも素晴らしい経験が出来たと思います。

そして最後三つ目は、やはりかけがえのない仲間がたくさんできたということです。日本人はもちろん、韓国人の人とも沢山仲良くなれました。キャンプに参加する前にちゃんと韓国語を予習してなかったので、言葉の壁はありましたが、笑顔には、言葉も国籍も関係ありませんでした。僕はこのキャンプに、外国人の友達をつくりたいという目的で応募したので、どうやって自分の気持ちを伝えようかと悩むのも楽しく、

国境の壁を越えて友達の輪が広がったことはとても嬉しかったです。さらに僕たちのチームは、韓国側に日本語が得意なメンバーがいてくれたこともあり、全チームの中で一番全員の仲が良かったと思います。仲の良さが事業発表会での最優秀賞という良い結果につながりました。一緒に過ごしたのはたったの六日間ですが、僕らの仲は一生ものです。

今日の社会では、日韓の関係は決して良いとは言いきれないところもあり、メディアの偏った報道に躍らされた、韓国への誤ったイメージを持つ日本人も少なからずい

ます。そのような人がなぜ生まれてしまうかといえば、実際にかかわりを持つことがないからです。人種も同じであり、隣国である韓国とは、バイアスをかけることなくもっともっと友好的な関係を築いていくべきです。実際に交流を経験した身として、韓国人はこんなにいい人たちで、国籍はちがうけれど僕達とおなじなんだということを周りに積極的に発信し、将来の日韓関係がさらによくなるよう貢献できることがあればどんどん取り組んでいきたいです。

最後はこの言葉で締めとします。“どんなときも、Kind-Go!!”

「第23回日韓高校生交流キャンプの感想文」

趙 彗星 (チョ・ヘソン)
金烏工業高等学校 1年



最初は、日本語が少し話せるということ、日本で遊べるということでこのキャンプに申し込みました。しかし、事前説明会でこのキャンプは、東日本大震災の被害を受けた地域で開催され、まちおこし・復興のための事業アイテムを企画するものだと聞きました。私のチームのテーマは福祉・介護だったので、家に帰ってすぐに日本の福祉・介護について調べてみましたが、施設や制度、どれもが韓国よりはるかに進ん

でいて、改善すべきところがなかなか見つかりませんでした。

日本に到着して、まずコンビニに寄りましたが、店員さんがとても親切でした。5000円を出しておつりをもらう時に、目の前で一つ一つ数えながら返してくれるのを見て、日本人は本当に親切なんだなと思いました。

日本の学生たちとどうすれば仲良くなれるかとても心配でしたが、ヒトシが先にた

どたどしいながらも韓国語で“アンニョンハセヨ”と挨拶してくれたので、安心しました。日本人は韓国人より協調性が強く、そのためより親しみやすいと感じました。

初日は、チームに溶け込むための時間が設けられていました。チームメンバー同士に、お互いについて、また気になることについて質問し合ったり、韓国のゲームを教えてあげたりしながらみんなと仲良くなれました。

二日目は、語り部バスに乗って、東日本大震災の被害をうけた南三陸の街や建物を見て回りました。本当にほとんどの建物が撤去されていたり、廃墟になっていて、惨憺たる光景でした。震災の時は、20mを超える津波が襲ってきたと聞きました。想像を絶する高さです。高台にあった学校の1階も全て沈んでしまったそうです。その上、いまだにご家族のご遺体が見つかっていない方もいらっしゃるとう聞きました。韓国では、小さい地震さえめったに起きないのに、隣国の日本がこんなにも大きな被害をうけて苦しんでいるのを見て、何の緊張感もなくのんびりと暮らしていたことに、少し罪悪感を感じました。しかし、被災地の方々は、こんなに大きな被害をうけたにもかかわらず、町を離れずに、復興やまちおこしのために一生懸命に頑張っている姿を見て、私も見習いたいと思いました。

語り部バスの後は、養殖漁業体験をしました。カキ、ホタテ、ホヤなどの試食もで

きました。日本の漁業は、韓国のものともあまり変わらないように思いました。船に乗っている間は、日本の友達とたくさん写真を撮ったり、すれちがう他の船に向かって手を降ったりして楽しみました。

養殖漁業体験が終わり、夏祭りの会場に向かいました。そこには、屋台のようなお店が一行に並んでいました。前を歩くと、“〇〇はいかがですか〜”と声をかけてくれるので、日本人は本当に真面目なんだなと感じました。夏祭りの会場で食べ物を買って食べたり、日本のアイドルの舞台を見たりしましたが、アイドルの舞台の前で一緒に踊っていた若者たちがいて、とても目立ちました。そういう若者たちを「オタク」と呼ぶのだと、日本の友達が教えてくれました。韓国にもこういうお祭りがあればいいのになと思いました。

夏祭りを楽しんだ後、バスに乗って、経済現場体験をするために養護施設に向かいました。バスの中で、日本の友達が私も知らない韓国の歌の歌詞を知っていたので、びっくりしました。K-Popが日本でこんなに流行っているのだと初めて知りました。

養護施設に到着し、その規模の大きさに驚きました。養護施設ではまず、室内設備などについて説明を聞いた後、入居されている日本のお年寄りの方々と一緒に南三陸の特産物である蛸の飾り物を作りました。日本のお年寄りの方の話は、発音が濁っていて聞き取りにくかったですが、良く聞いてみると、100歳を超えている方もいらっしゃいましたし、昔韓国で住んだことのある方もいらっしゃいました。趣味について

聞いてみると、みなさん歌を歌うことが好きだと話してくれました。また、津波が襲ってきたときには、この施設にいて、命が助かったと話してくれました。蛸の飾り物を作り上げてから、壁に旗をかけて、「なるこ」という日本の伝統楽器を鳴らしながら日本の伝統踊りを教えてもらいました。本当に楽しかったです。

この日の夕方は、花火大会の鑑賞をして、勝ち抜きクイズ大会、ゴールデンベルに参加しました。他のチームの日本の学生とペアを組んで、問題に答えていきましたが、オリンピックに関する問題で脱落してしまいました。

夜には、日本の友達にもものすごく辛い韓国の「プルタクポクン麺」を食べさせましたが、みんなの反応が可笑しくて、笑いが止まりませんでした。

三日目は、一日中事業アイテム企画に取り組みました。前日に、ある程度話がまとまっていた「養護福祉コンサルティング会社」という大まかなアイデアについて、細かいアイデアをいくつか出し合いました。一つ目は、養護施設に入居されている方から聞いた、身体が不自由でなかなか外出ができないという話を基に、「医療機器の設備を完備した観光列車」というアイデアを出しました。それには、南三陸の特産物にちなんで、「ゴーゴー、オクトパス、ゴー」と名前を付けました。このアイデアの特徴としては、お年寄りの方は安心して観光を楽しめることができると、今は使われず放置されている線路や列車の再利用

ができるというメリットがある上に、自然災害が起きた時には、避難路や避難所として利用できるという利点があることです。このアイデアを宣伝するために、CMを作りました。日本と韓国両方で人気のある「ドラエモン」というキャラクターを利用したもので、私はのび太君の役を演じました。少し恥ずかしかったけれど、楽しかったです。

二つ目に、「ファンド」というアイデアが出ました。投資の一種で、「サーモン・ファンド」と名付けました。海に出た鮭が産卵のために川に戻ってくることから、預かったお金にプラスして返すという意味でサーモンという名前を選びました。このファンドを宣伝するために、「オロナミンC」のCMをコピーして、CMを作ろうとしましたが、途中、時間がないことに気付いて、とても残念だったんですが、あきらめました。

そして、最後のアイデアとして、人手不足という話を聞いていたので、その話を基に、仕事を見付けたり、広報用として利用できるウェブサイトを開設することにしました。

四日目、私たちは、発表を終えてから、内心最優秀賞を期待していましたが、残念ながら優秀賞をもらいました。私たちのアイデアが南三陸のために少しでも役に立てればいいなと思いました。

五日目は、松島・仙台市内でチーム別に自由観光をしました。十二神将の絵が描かれているお寺に立ち寄ったり、入場料が少

し高かったのですが、トリックアートミュージアムに入ってたくさん写真を撮ったり、ドン・キホーテというディスカウントストアに立ち寄ったりしました。ドン・キホーテでは、商品の一つがサンプルとして開けておいてあって、中身の確認もできるし、直接触ってみることもできるので、いいアイデアだなと思いました。ただ、少し、性的な部分が韓国より開放的だなと思いました。

ドン・キホーテを見回ってから、バスに乗って仙台駅に向かいました。まず、バスがとても面白くて、韓国では降り口のところが、日本では乗り口になっていました。また、日本では乗る時にチケットを手にとって、距離が遠くなるにつれて運賃が高くなるシステムになっているのが新鮮でした。バスに乗って感じたことは、日本は本当に安全運転をしているんだなということです。道路の速度制限が40でしたから・・・仙台駅は本当に広かったです。駅で色々買い物をしたり、観光をしてからホテルに戻りました。

夕方には、特技披露があつて、私も出たかったのですが、日本に楽器を持ってくる

ことができなかつたので、残念ながらあきらめました。

その日の夜は、明け方まで日本の友達と一緒に騒いで遊んでいて、うるさいと怒られました。日本は本当にマナーを大事にしているのだと思いました。

最終日、日本の友達とのお別れが、とても寂しかったです。また会えないかもしれないと、涙を流している友達もいました。

日韓高校生交流キャンプに参加して、たくさんのことを学びました。また、日本に対する偏見を捨てることができました。多くの命を奪っていった東日本大震災のような自然災害が再び起こらないことを祈ります。

ひとし、あきら、まりも、りな、まな、これからみんなとすぐに会えなくなるのがとても寂しいです。可能であれば、来年の第24回にも参加したいです。最後に、スタッフの方々、私の財布を見つけて下さって、ありがとうございました！

「刺激的な6日間」



上山 万尋

明治大学附属明治高等学校 3年

「日韓高校生交流キャンプ」。私がこの言葉を初めて目にしたのは、学校の廊下に掲示されていたポスターを見たときだ。私はK-POPが好きで、そこから韓国の文化に興味を持った。私はただ、韓国の学生と友達になりたい、そのような動機で申し込みを決めた。選考を通ったというメールは部活帰り、スクールバスの中で開いた。嬉しさとキャンプに対する期待で、自然と口角が上がっていただろう。説明会でOB、OGの方のお話を聞いて、期待は膨らむ一方であった。

キャンプ当日。これからの6日間に対する期待で胸を躍らせていたら、東京から仙台まであっという間だった。そこで一部の参加者と合流、南三陸町へとバスで向かった。バスの中ではガイドさんが仙台市の歴史から震災のことまで、様々なお話をしてくださった。そしてホテルに到着。部屋で日本のメンバーと韓国語での挨拶を練習していると、ドアが開いた。これが韓国の学生と初めて対面した瞬間である。その後、片言ながら相手の言語で自己紹介するも会話が続かない。男子メンバーと合流してチーム名を決める、チームを紹介する模造紙を作成するなどの作業を通して他チーム

に比べて、会話が少ないように感じた。

2日目は震災学習から始まった。バスで語り部さんのお話を聞きながら震災遺構を回るととても胸が苦しくなった。また震災の経験を今後の防災に生かしてほしいという地元の方の強い思いも感じた。その後は養殖漁業体験、ホテルの清掃作業など貴重な体験をさせて頂いた。

その夜行われたゴールデンベルでは韓国の女の子・ジへとペアになった。お互い共通して話せる言語が英語だったので英語でコミュニケーションをとった。この、英語を話さなくてはいけないという状況がとても新鮮で、これが今回のキャンプで初めて国際交流していると感じた瞬間かも知れない。

3日目はこのキャンプのメインといっても良いだろう。一日中、事業発表会の準備だ。私たちのチームは昨晚話し合いで決めた、「南三陸町に特化したガイドアプリ」という事業案を具体化するところから始まった。ところが、作業はスムーズには進まない。宿舎に帰ってきてからも一つの部屋に集まり作業を進めたが、PCのケーブルが

見当たらないなどのアクシデントもあり、満足のいく準備はできなかった。

徹夜だ。しかしこの徹夜は私達チーム6にとって大きなターニングポイントだったと思う。メンバーの距離が一気に縮まったのだ。言葉の壁を感じながらも発表原稿を仕上げてくれた薫とユビンは頼もしかったし、それを英語の通訳でサポートした綾乃と慎ちゃんも格好良かった。日本語のパワーポイントを韓国語に訳すことのできるジュヒョンとウンスには刺激を受けた。二人とも日本語を勉強して一年だというからだ。私ももっともっと勉強しなくてはいけないと強く感じた。夜通し韓国語、英語、片言の日本語、そして亜美の関西弁を聞いていたら、明け方には自分でも笑ってしまうほど訛って、薫はキャンプが終わるまでネイティブな発音に戻れなかったが、これは頑張った証、いい思い出だ。一生のネタになるだろう。

4日目、事業発表会本番。練習通りのプレゼンを行えなかったが、様々なアクシデントの中、良くやったと思う。悔いはない。その夜のキャンプファイヤー、縁日、花火は言葉の壁なんか少しも感じなかった。ただただ楽しかった。

5日目。実質、最後の日。松島観光、仙台観光。1日目、2日目が嘘のように会話が絶えなかった。私たちのチームが一番騒がしかっただろう。最後の夜、一つの部屋に集まって最大限一緒に時を過ごした。ト

ランプなどのゲームなしに、会話だけで一晩中盛り上がったのはすごいことだと思う。そしてまた、日本語と韓国語を通訳して会話の中心になってくれたジュヒョンの語学力には刺激を受けた。

別れの日。最後に一言ずつ挨拶をしているときに私は泣いてしまった。涙をこらえきれなかったのは久しぶりだった。たったの6日間でこんなにも恋しくなるとは思っていなかった。どんなに濃い6日間だったのだろう。韓国の学生が乗った空港行きのバス、出発直前にそのバスの窓越しにジンソンと名札を交換した。その名札の裏にハングルで書かれた日本語のメモを見て、今まで涙をこらえていたメンバーも泣いた。日本語を覚えて、私たちに少しでも近づこうとしたジンソンの気持ちと努力に感動したのだ。チームのメンバーとはキャンプが終わって二週間が過ぎた今でも連絡を取り合っている。みんなの勉強が落ち着いたころに再会する予定だ。

ここまでも少し長くなってしまったが、ここに書き切れていないことがまだある。それくらい多くの経験をさせて頂き、沢山刺激を受けた。英語でコミュニケーションが取れたときの喜びと、もっと具体的に自分の考えを伝えたいと感じた悔しさは、今後の学習において大きなモチベーションになるだろう。韓国語も勉強してもっと親しくなりたいと思った。日本の学生からも刺激を受けた。留学経験が無いのにも関わらず英語がペラペラな綾乃をみて、もっと工

夫して勉強しようと思った。全国から集まった個性豊かなメンバーと過ごして、私自身、自分の個性に自信をもって、自分のやりたいこと、やるべきことにもっと一生懸命になろう、そんな風に思えた。

ように思う。高3の夏にこのような経験をさせて頂いたことに感謝している。チーム6のメンバー、そしてメンター・ヤンヒさん、みんなが成長した姿で再会する日を楽しみにしています！

今回のキャンプを通して視野が広がった

